

はじめに

イメージを体系化した新しい比喩の辞典を世に送る。

ふりかえると、もう半世紀も前のことになるようだ。若かったあのころ国立国語研究所に勤務中、国家公務員の身分でのんびり比喩表現の研究にどっぷり浸かった。その成果が、一九七七年の二月、研究報告57『比喩表現の理論と分類』と題して世に出た。当時としては珍しく担当者の個人名を明記した六〇〇ページを超える大冊の報告書である。打ち合わせの席かどこかで、この若造がその版元の社長と造本について雑談したらしいほんやりとした記憶がある。それがどう反映したのか、白っぽく目の粗いざつくりした本クロス貼りの表紙に仕上がった。なんだか小津映画のタイトルバックを思わせ、しかも函入りという豪華な造りになっている。研究報告書としては異例中の異例らしいのだが、世間知らずでその当時、「異例」などとはまったく気がつかず、天真爛漫にひたすら喜んでいたように思う。

国の刊行物が豪華本だったのが人目を引いたのか、それとも、テーマが斬新で魅力的だったのが関心をよんだのか、ほどなく角川書店から夢のような新企画の話が舞い込んだ。この幸運を最大限

に生かすため、研究報告書で分析の対象とした五〇編の小説の実例との重複を避け、広い範囲の文学作品から新たに大量の用例を収集した。同年末に七〇〇近い用例を分類・配列した本邦初という『比喩表現辞典』を個人の著作として出版した。一九九五年の夏に出た増補新版では八〇〇を優に超える多数の用例を収めている。最初の版が出てからしばらく経って、方言関係の比喩の例を集めた本とか、外国作品の比喩の例を集めた本とか、比喩関連の辞典の試みもいくつか現れたようである。

*

「りんごのような頬」「もみじのような手」「雪のように白い肌」「熊のように毛深い」「氷のように冷たい」といった、昔からよく見かける例は、順に〔頬〕〔手〕〔肌〕〔毛深い〕〔冷たい〕といったトピックに関する形容に、それぞれ〈りんご〉〈もみじ〉〈雪〉〈熊〉〈氷〉というイメージを持ち込んだ慣用的な比喩表現の典型例である。気が引けるのか、純文学の作品ではこういう陳腐な例を避ける傾向があるようだ。

幅広く文学作品から採集した膨大な数にのぼる実例を一冊の辞典にまとめるにあたり、その『比喩表現辞典』では、多数の〔トピック〕をある規準で分類し、その枠組みに沿って、それぞれの〔トピック〕ごとに、さまざまな〈イメージ〉の例を列挙することとした。それがごく自然であり、その〔トピック〕にどのような〈イメージ〉の例が現れるかを概観して、読者が自身の比喩表現の参

考にできるといふ実用的な利点もある。

それに対し、『もの・こと・ことばの イメージから引ける 比喩の辞典』と題した本書は、それとはまったく逆の構成になっている。すなわち、〈イメージ〉のほうを体系的に分類し、そこにどのようなトピックが出現するかを探る初めての試みである。このように整理することで、何が見えてくるか。〈りんご〉〈もみじ〉〈雪〉〈熊〉〈氷〉といった比喩イメージが、それぞれどのような描写対象からの連想として出現したかがわかる。

具体的な例を引こう。たとえば、夏目漱石は『吾輩は猫である』という長編小説の末尾近くで、「巻煙草の吸い殻を蜂の巣の如く火鉢の中へ突き立てて」という比喩表現を用いてみせた。この実例でいえば、多数の「吸い殻」の突き刺さった火鉢という現実のトピックを形容するのに、〈蜂の巣〉というイメージを導入して独特の比喩を構成したことになる。すなわち漱石は、「乱立する吸い殻」から〈蜂の巣〉を連想した。この文豪の作品から多数の例を集めれば、そこから漱石夏目金之助という人間の意識の内面にひそむ心の動きがうっすらと透けて見えるかもしれない。

多くの作家の実例から、幅広くそういう様相を眺めているうちに、やがてそれらの対象について日本人が無意識のうちに抱いているイメージの様相が浮かんでくるかもしれない。少なくとも、その傾向を探る手がかりが得られるような気がする。ふっくらとそういう期待がふくらむ。

比喩表現はその作家の心象風景の点描であり、意識下の世界観を反映しているはずだ。日本語の

はじめに

中に生きている人間の連想の広がりを見つめつつ、ものにとらえ方、考え方の底にうごめく日本人の感性のゆらめきを想像してみたい。

*

東京堂出版から、これで何冊目の著書になるだろうか。『感情表現辞典』以下の福島光行さんに始まったご縁は、渡部俊一さんに引き継がれ、現在の上田京子さんに担当が移ってからだけでもすでに数冊を数える。このユニークな本もまた、その上田さんの超人的な働きによって形になり、ようやく世に出ることとなった。感謝のほかはない。この本がやがて多くの読者に迎えられることを夢みつつ、杖を引いて散歩に出かけよう。今でも階下で愛犬アーサー殿下がお呼びのような気がする。ともあれ今夜も赤ワインになりそうだ。

二〇二三年 師走に入りて

東京小金井 ひそやかな自宅で 中村 明